

はしがき

本報告書は、平成18年度に当研究所において実施した研究プロジェクト、「21世紀の「国づくり」に立ち会って・平和構築について現場から考える」の研究成果をとりまとめたものです。

旭英昭氏は、2004年1月から2005年6月まで、初代駐東ティモール大使を勤められました。本報告書では、独立後間もない同国における平和構築の現状をつぶさに見てこられた筆者が、日本および国際社会、とりわけ国連による東ティモール支援について、幅広い観点から考察されております。

日本は1999年以降東ティモールで展開されたさまざまなタイプの国連ミッションに対する自衛隊や文民警察官の派遣、緊急人道支援および復興開発支援を通じ、東ティモールの国づくりに積極的に貢献してきております。その中で、旭氏は特に、自衛隊による民生支援や「人間の安全保障」外交の実践などに関して深い知見を提示されております。また、国連PKOミッションのあり方やマクロ経済的側面からの分析は、東ティモールにとどまらず、紛争後国家における国づくりについて考える際に有益な洞察に満ちております。

さらに、外務省中間研修としてNGOでボランティア活動に従事されたご経験を踏まえ、国際協力における官民協働のあり方、および国際的なNGO活動に求められる人物像について、現場で実際に活動するボランティアの肉声を交えながら大変興味深い考察を披露されております。加えて旭氏は、昨（2006）年央の武力闘争で顕在化した同国の平和構築プロセスの問題点に関して鋭い分析を披露され、「何故、国連PKOがしばしば失敗するのか」という関心事に対しても注目に値する答えを引き出されております。

旭氏は1980年代初め、イスラム革命の渦中にあったイランに勤務した他、ジュネーヴ及びニューヨークの日本政府代表部で多国間外交に従事し、更に国際貢献が大きな外交課題になる1990年代には外務本省でこの問題を直接担当され、それと前後して国際平和協力法案の起草作業にも直接参加されました。このような筆者のご経験が東ティモールで培った「現場の目」、「現場の感覚」と相俟って、平和構築という今日的な課題についての論考をとりまとめる上で、その大きな特色となっております。

なお、ここに表明されている見解は全て執筆者のものであり、当研究所の意見を代表するものではありませんが、日本の平和構築外交の理解に資する貴重な資料となることを期待しております。

最後に、本報告書の執筆にご尽力いただいた旭大使に対し、改めて深甚なる謝意を表します。

平成19年3月

財団法人日本国際問題研究所
所長 友田 錫